

次の追悼文を寄稿されました岡本志良氏（竹下富士松氏の後任の中部支部長）も今年五月三十日逝去されました。事務局

竹下富士松さんを悼む

岡本志良

辰巳会の名古屋支部長竹下富士松さんが、突然亡くなった。昨年の暮十二月十二日である。その日の朝普通に起きて間もなく、脳溢血で倒れてそのままであった由。数え歳八十五歳である。そばに居た人は勿論、本人もビックリしたに違いないと思われる。昨年春の春愛知県の西浦温泉で全国大会を開いた時、体調が優れない模様で心配していたが、その後男の病氣前立線肥大の手術を受けられた。結果は順調で、退院後の通院治療も完全に終った連絡があった。その時の喜び方は、ほんとに嬉しそうであったことを覚えてる。それ程この手術には苦痛が伴うようであった。両方の病氣に因果関係はなかったと思われるが、惜しい人を失ったものである。

竹下さんと私との関係は、私が岡崎市に住むようになり、名古屋支部の会合に参加してからであるが、竹下さんの手伝をするようになって更に親しくなった。誰も否定しないであろう彼の性格は、角力で鍛えた体格に似て円満にして疑念を感じないものを備え、安心して好感を持つことが出来た。又立案実施に際しては、小心と思われる程の綿密さがあり、念には念を入れる細かい配慮がなされ、そ

の結果にも反省が行われ、往年の活躍が想起できた。

彼と親交を深めた原因に、各々の連れ合いに共通点があったことがある。竹下さんの奥さんは名古屋市の市会議員を努められ、婦人運動に大きく貢献されたが、その後には竹下さんの隠れた援助が大きかったことは、広く知られている。私の家内は平凡な家庭の守り役であったが、共に死亡の時昭和五十九年五月であり、竹下さんの方が一週間早かっただけである。更にこの世の生存期間も殆ど同じで、竹下さんが少し長かった。こんなことから爾来竹下さんの自宅を訪れ、歓談の機会を持ったが、五カ年に近いこの親交も消滅することになり、淋しい限りである。

竹下さんの自宅は名古屋市内にあるが、玄関を入って左側の小さな庭に沿って進むと、道路に面した大きな部屋があつて、これが自分の室であつた。この入口近くに古い佛壇が飾られ、その右に続いてベッド風に作られた広い寝室が残されていて、在りし日が偲ばれた。自分の枕元電話が引かれているこの部屋で、誰に遠慮をすることなく、自由な日常を過ごしていたと思われる。葬儀は十四日盛大にここで行われた。大勢の子供や孫に送られた葬列は力強いものが感じられ、確実な竹下家の繁栄を見ることができた。最後の別れを惜しんだお棺の寝顔には一抹の憂色もなく、生あるものは死すの泰然さを見ることができた。辰巳会も「たつみ」誌に残されたあなたの寄稿詩の如く、美しく長く続くことを期待しながら、御冥福をお祈り致します。そしてお墓にお二人が揃ったら、お参りに行きたいと思います。

随想

アイロニー

牧冬彦

城山三郎さんの「鼠」が世に出たのはもう二十数年も前になる。ご存知の方も多いと思う。最近その新装版が出た機会に、これを再読して又新たな感動を覚えた。

云うまでもなくこの作品は、明治から大正にかけて日本経済界に彗星のごとく登場し、やがて猛烈な一大火球となって第一次大戦後の世界経済を震撼せしめたあの鈴木商店と、その活躍の舞台となった神戸の物語である。この両者は本来産み出したものと産まれ出たものとの深い絆によって、手を携えて歴史の舞台に登場すべき筈であつた。然し、歴史の気まぐれは時として手に負えない経過を用意する。米騒動という狂乱の世相の中で、鈴木商店は神戸市民の不倶戴天の敵として、完膚なきまでの悪役に仕立て上げられていく。悲劇的なその成り行きをある程度予感しつつも、あらゆる弁明の機会を自ら斥け、「間違つたことをしてはいない。やがて分つてくれる」と冷然として傍観する鈴木商店支配人、金子直吉。

著者の綿密周到な考証によって、当時の偽りの風説は一つ一つくつがえされていく。この間に登場する多くの神戸市民のすべてが、この著者のおびただしい例証の中にちりばめられて、それ自体が小さな物語を構成している。

金融恐慌の大波の中で、今やすべてを失った彼に、世間の風はあくまで冷たかつた。その中でそこだけがホッとするような一つの挿話が語られる。金子直吉の令息武蔵氏が東大哲学科の気鋭のヘーゲリアンとして、西田幾多郎博士の令嬢との結婚式の日を迎える。その日、二人の巨人は短く互いの名を名乗りあつただけで、以後二度と相会うことはなかつたという。「嫌っていたわけではない。それぞれの世界に生きた二人に、それ以上の言葉は虚妄であつた」と著者は記している。

不格好なビリケン頭、その中に嵐のような商魂をたぎらせ、なおかつ「煙突男」と異名をとるほど工業立国を夢み、国内で商売をやるだけでは「芸者と花札遊びをやるようなもの」と喝破して、どこを見ているか分らぬ強度の斜視を常に「世界」に向けていた男。そして終生完璧な無私を貫き通した男。

今日の時代相に対して、これ程痛烈なアイロニーを提示する人物が他にあるだろうか。（神戸製鋼所取締役相談役）